

ペシャワール会/ Peace (Japan) Medical Services



ペシャワール会会長／PMS総院長

村上 優

ペシャワール会発足メンバーで1992年事務局長、2015年よりは会長。2019年中村哲医師没後に現地PMSメンバーに求められ後任でPMS総院長を併任。精神科医。

「私たちの現地事業が多くの人のために、ひとつの灯火として存続することを願って止みません——中村哲」

ペシャワール会は、1983年に中村哲医師のパキスタン北西辺境州（現カイバルパクトウクワ州）ならびにアフガニスタンでの医療活動を支援する目的で創設されました。以来、39年が経ち、現在はアフガニスタンのナンガラハル州を中心に医療、農業、灌漑用水路事業を展開しています。アフガニスタンでは国際NGOとしてPeace (Japan) Medical Services = PMSが登録されて現地活動の全てを実施しています。2019年12月4日に何者かに襲撃されて、PMS総院長だった中村医師が亡くなりましたが、「中村哲先生の事業は全て継続し、夢は全て引き継ぐ」を合言葉に、PMSとペシャワール会が一層の連携を強めて現在に至ります。死せる中村哲が、その後のすべての事業を今でも進めている実感があります。ペシャワール会は23,000名を超える会員・支援者が活動を支え、PMSはアフガニスタンで104名のスタッフ、約200名の作業員が働いています。

中村医師が現地活動を始めた1984年には当時のソ連軍がアフガニスタンに侵攻し、1989年のソ連軍撤退後は内戦が続きました。1996年にタリバンが政権を取り、一時期は治安が回復しましたが、2001年に米国での同時多発テロを理由に欧米軍がアフガニスタンに侵攻、

戦闘が続き治安は悪化をたどっていました。2021年、再びタリバンが政権を奪取しましたが、この間実に40年も戦乱が続いていました。そのうえ2000年以降は、地球温暖化の影響による大干ばつが、国民の90%が農民・遊牧民であったアフガニスタンに大きな打撃を与えています。以下、PMSの具体的な活動を紹介します。

医療

中村の医療活動はパキスタン北西辺境州から東部アフガニスタンのハンセン病コントロール計画に始まります。加えてアフガン難民キャンプでの医療に従事しつつ、アフガン人医療関係者を組織化して、後のPMSの基礎を作り、育てました。

中村は、ハンセン病の多発地帯は山岳地域の貧しい地域であることを認識し、山岳無医地区医療計画をたて、山岳地域に6カ所の診療所を建設しました。医師や看護教育にも力を入れ、これらの医療者を診療所に派遣し、農村・山村無医地域での医療を提供する体制を作りました。戦火の広がりや、時の政権・国際機関の思惑などに翻弄されて、現在はダラエヌール渓谷にある診療所でのみ診療を継続しています。ハンセン病根絶計画は途半ばですが、ダラエヌール診療所はこの地域での医療活動の拠点となっています。

灌漑事業

2000年の大干ばつの際に「まずは命をつなぐ」として飲料水の確保を目的に



Q3貯水池（2009年6月）



①中村哲医師 ②植樹8年後（2017年8月）③バルカシコート堰建設（2021年11月23日）

井戸事業が始まりました。2006年までにナンガラハル州の多くの地点で1600本の井戸掘りを実行、飲料水だけでなく大口径の灌漑井戸や、涸れたカレズの補修などを手がけました。しかし、進行する干ばつのために田畑が土漠化して農業は荒廃、人々の健康や生活が破壊されていきました。2003年、「百の診療所より一本の用水路」を合言葉に、「緑の大地計画」として6000m以上の山々の雪を水源とするクナール川より水を導く「マルワリード用水路」建設が始まりました。急流のクナール川に取水堰を造ることは困難でしたが、江戸時代に建設され現在も機能している筑後川の山田堰にヒントを得て、斜め堰を導入して成功を収めました。マルワリード用水路は2010年に全長27kmに達して周辺を潤し、土漠化した農地が復活していきました。地元の農民の多くが用水路工事に参加して、蛇籠工や柳枝工、堰板方式の取水門、石出し水制など伝統的な工法を用い、地元にある資材（石材など）を組み合わせ、PMS方式灌漑用水路方式がみだされました。この成果を見たクナール川周辺住民からは工事の依頼が度々あり、現在

までに11本の取水堰を作り壊れた用水路を再生し、新しい用水路を建設するなどして16,500ヘクタール65万人の人々が生活できる沃野が復活しました。これらは「アフガン・緑の大地計画——伝統に学ぶ灌漑工法と甦る農業」（中村哲著2018年）としてまとめられ、その実地書として「PMS方式灌漑事業ガイドライン 水と食料の確保を」の作成が中村の生前から始まり、没後も多くの関係者の努力で2021年に完成しました。これをもとにアフガニスタン全土での干ばつへの対処、農業の復活を目指しています。

農業

マルワリード用水路が到達したガンベリ地区に230ヘクタールの土地を国から貸与され、ガンベリ農園がPMSによって試験農場として運営されています。麦、米、果樹、野菜が栽培され、酪農や養蜂が行われています。灌漑した地域には現在まで130万本が植樹され、農地と合わせて緑が回復しています。中村は「まず命のある事、三度三度のごはんが食べられること、家族一緒におれること、

それ以上の望みを持つアフガニスタン人は少ない」と平和の概念を具体的に述べています。戦禍、干ばつ、飢餓、難民となるなど常に命の危機にさらされてきたアフガニスタンの人々と共に歩んだ中村の姿が、この言葉に現れています。

2022年1月現在、全てのペシャワール会/PMSの事業は中村の精神を引き継いで行動しています。復活したタリバン政権に対し、国際社会は「女性の人權」「包摂的でない政権」として経済制裁を科し、米国にあったアフガニスタンの全財産を凍結し、世界銀行やIMFもそれに倣いました。未曾有の干ばつで国民の半分以上が影響を受け、800万人以上の人々が飢餓・餓死の危機に迫っている（WFPの発表）現実に加えて、経済的な混乱がアフガニスタンを襲っています。ペシャワール会/PMSは生命の危機に瀕している人々に、2022年1月23日より食糧支援を実施しています。ささやかですが現地PMSスタッフが同胞のために活動をしていることに誇りを感じています。